# 都市伝説の不死身さん

まちがい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
都市伝説の不死身さん

【Ｎコード】
Ｎ３５６８Ｓ

【作者名】
まちがい

【あらすじ】
いろんなところで噂になっている都市伝説。それが人の思い、信じる力で現実に干渉する力を持ち、生きとし生けるものに牙を剥く。それをなぜか解決しなくてはならなくなったある不死身の人のお話。

## 下男（前書き）

皆さんこんにちは。初投稿でございます。いやぁ難しいですね小説（＾―＾；）
どうか少しでもレベルアップしたいので誤字、脱字やら指摘やらよろしくお願いします。僕の書いた文章が少しでもあなた様の暇つぶしになりましたらこれ幸いでございます。m（＿＿）m

# 下男

深夜零時、ここ某県にあるベッドタウン。マンションの廊下のライトや街灯の数が多いおかげで時間のわりにはそれほど暗くはなかった。周りはきれいに整備された道路や歩道。その所々で街路樹が植えられている。見渡す限りはマンションしかなく、近くにコンビニがないほど寝ることだけに特化した街が広がっている。そこに一人だけ、人影が見える。

「はぁ、疲れた。早くお風呂に入って寝ないと明日の仕事に響くわ」

新田佐代子はこの街の駅から一時間かけて仕事にでかけている。今日は残業が多くあり、その始末に今の時間まで働いていたのだ。佐代子が住んでいるマンションは駅から十分ほどのところにある十一階建の六階。なかなかの部屋で家賃も安く、それに駅に近いことがそこを選んだ理由だった。

佐代子はエレベーターで六階に上がり、そこから一番端のドアに鍵を入れた。しかし、

「・・・・？」

鍵からは解錠した感覚がない。鍵を閉めなかったのかと考えたが、毎朝念入りに確認をするようにしていたのでそんなことはないはず。

ペタ・・・ペタ・・・ペタ・・・

するとドアの向こうからこっちに近づいてくる足音が聞こえてきた。それは裸足でフローリングの廊下を歩いている音に似ている。

ペタ・・・ペタ・・・ペタ・・・

その足音は段々と大きくなってきている。佐代子の手に嫌な汗がでてきた。

すぐに逃げようと考えたが家の中にだれがいるのか確認したいのと、何か盗まれては堪らないという余計なことを多く考えてしまっていて逃げることができない。そのほかにもこのマンションの廊下の電気がとても明るいことと、疲れてイライラしていたのも原因かもしれない。

ペタ・・・ペタ

ついにドアの前で音が止まった。心臓の音がとてもうるさく感じる。口もカラカラになっていた。

今更逃げればよかったと後悔したが、もう遅い。

ギギィィ・・・・・

少し錆びたドアの開く音が深夜の廊下に驚くほど響く。

「！！！！！」

声を上げそうになったその時、

「遅かったねえ姉さん」

そこには佐代子の妹の美代子がいた。

佐代子は心臓が止まるような思いをしていたことを悟られるのを恥ずかしく感じたのでなんとか平常心を保ちながら

「みぃちゃん？なんで私の部屋にいるの？あなた学校は？」

「姉さん、一つずつ説明するから待ってよぅ。」

質問攻めになりそうな状況を一回納めて、とりあえず部屋に上がることになった。

部屋はワンルーム。しかし十五畳を超える広さと家具家電付き。廊下から部屋に入ってすぐのところに化粧台、ベッドはベランダに通じる窓の向かいの壁に置かれている。真中には小さい机が一つ。あとはタンスとテレビがあるだけの全体的に質素な感じになっている。

「学校は今夏休み。たまには姉さんの顔見ようと思って実家にある合い鍵で部屋に入ったら仕事でいなかったから待ってたの。思ったより遅かったから心配したよぉ」

どうやら昼ぐらいから部屋にいたらしい。なかなか我慢強いことだと佐代子は思う。

「じゃあ、みぃちゃんご飯は食べたのね？私は外で食べてきたから冷蔵庫なんにもないわよ」

「それが何も食べてないんだよ。なんでもいいからご飯ちょうだいよ姉さん～」

疲れて帰ってきた家主に向かってご飯を作ってくれとはよく言う・・・と心に思いながらも廊下にある冷蔵庫に向かって歩き出した。

「それにしても六階とはいえなかなかいい景色だ・・・！」

「それもこの部屋に決めた理由でもあるのよ。夜景を見ながら飲み

お酒は格別なんだから☆」

ドサァ

「？今の音は何？みぃちゃん？」

重いものが倒れるような音が部屋から聞こえてきた。
佐代子は妹がベッドに飛び込んだ音と思い、しばらく気にしなかったが、いくら待っても返事が聞こえない。

（寝ちゃったのかな？）

そう思いベッドのほうに歩いて行くとそこには、

首がぱっくり開いて噴水のように血を流す妹が横たわっていた。

「～～～～～～～～～～！！！」

今まで出したことのない声が口から出てきた。
さっきまで楽しくおしゃべりしていたはずの妹が手足を痙攣させながら部屋に敷いている絨毯の色を赤に塗りつぶしている。
その光景から目が離せなくなったせいで、妹の・・・いや、正確には妹だったものの状態をありありと脳が理解していく。
首が切られ、服もズタズタになっていることから、体中をなにかで切られているらしい。目は赤く血走っていて、口も大きく開いている。どうやら舌も切られているようだ。手足もグシャリと曲がっていて、まるで、とても強い力で捩じられているように感じた。
佐代子はこの状況を現実と受け止められず、クラクラする頭の中は

真っ白なまま、ただ、立ち尽くしていた。

一分・・・いやもしかしたら数秒くらいだろうか。時間間隔もままならない状態にあれども、事は急を要した。
まず、携帯で救急車を呼び、事件性があるということでパトカーも来てくれるという。
血はすでに止まっている。恐怖から悲しみに感情が動こうとしているときに、ハッ！と気付いたことがあった。
美代子は今まで私と話していて、そして突然惨殺されている。だとしたら・・・・

今、この部屋に犯人がいるということだ

それを頭が理解したとき、

ズル・・・・ズル・・・・・

と何かが這い出てくる音が聞こてきた。

（！！！！！！！！）

ズル・・・・ズル・・・・・

何が何なのかわからない。妹の惨殺された光景を見た後にまだ何かあるのかと混乱が頭を支配した。

ズル・・・・ズル・・・・・

そんな佐代子の状態などお構いなしにその音は段々ペースを上げてきている。

ズル・・ズル・・ズル

（もう何も見たくない！見たくない！見たくない！）

そう思っていても眼球はその音のする方へ視線を移す。

気づけば完全に目線はベッドの方へ向いていた。

（！！！！！！！？）

そこにいたのは・・・・・・

皆さんは都市伝説をご存じでしょうか。例えを上げるなら口裂け女や人面犬もこの部類に入ります。また都市伝説はとてもジャンルが多く、芸能界の都市伝説や食べ物の都市伝説、技術の都市伝説など様々なものがあります。

さて、この都市伝説は人の噂からできております。そして人がこの噂を知れば知るほど、元々いないものが知っている・信じている人の思いの力で現実に干渉できる力を手に入れます。

このお話はそのようなことが起こりうる世界のお話です。

## 下男（後書き）

なんとかここまでもっていけました。しかし、いまだ主人公さえ登場しておりません（＾―＾；）次回に登場予定でございます。さてさて、都市伝説。なかなか面白いですよ！怖いものから笑えるものまで多くありますので、興味がありましたらぜひインターネットなどで検索してみるといいと思います。少しでもあなた様の暇を潰すことができたでしょうか？それだけが心配・・・

## 下男2（前書き）

やっと主人公とヒロインの登場です。なんか話の進行スピード早いかなぁ。ご意見、ご感想お待ちしてます。

# 下男2

蝉がよく鳴くこの季節、木々は青々とし、太陽はギンギン。道路のアスファルトはとてもじゃないが触りたくないほど熱せられている。僕の周りを足早に過ぎていく人々はみんな暑そうにハンカチやタオルで顔を拭き、意味がないと知っていても手で扇がずにはいられないそんな季節。今日から学校は夏休みに入り、学生はこれからの予定を考えるだけでニヤニヤしている。
なのに・・・・・

「ええぇっと・・・どうしたら許してくれます?」

なぜ僕だけが
車とロープで繋がったまま、アスファルトの鉄板（強火）に転がされているのだろうか。（もうぐるぐる巻きですよ）

「許すもなにも、これは実験よ。結果が出るまで続けるわ」

最近引っ越してきたばかりのこの娘は、ご町内の人とまだそんなに親しくなっていないのに、このような暴挙に出るとは・・・恐いもの知らずか！（うちの町内ナメんなよ！）

「だからってこれは人としてどうかと思いませんか?人権侵害だよ侵害!これだから胸が大きいだけの性格破綻しｇｙｒｍｂｑｗ！！！ぶばぁ！やめてごめんなさい申し訳ございませんからその無駄にでかいスライム（おもちゃのネバネバ）を顔にかけないでぇぇぇぇぇえ！！」バタバタ

「あんたは人が気にしていることをいちいちいちいち突っついて！

こうなったら容赦しないわ！やって！」

娘が叫ぶと車に乗っているいかにもグランプリトリマシタァ！って叫びそうな黒の外人さんがニカッっと白い歯を輝かせた。

（おいおいマジかよ・・・・）ギャアアアアアアアアアアアア・・・

リアルに恐怖を感じた束の間、

ブルヲヲヲォォォ

石油王の子供だといろいろトラブルに巻き込まれることが多かったらしく、そのせいか知識と戦闘の技術だけは一般人の常識を逸脱している。（実際僕はその被害に今あってるところです）向こうの国は危険と判断した両親がこの日本に娘だけを送ってきたらしい。後でメイドさんとかいないの？って聞いたら

「何回かその人たちに拉致されかけたから。信頼のおける人しか側におかないようにしてるの」

って言われてゾッとした。

お向いさんということで挨拶しにいったら門でまさかのギロチン攻撃を受け（首が飛びました）、さらには地雷（足が吹き飛びました）、銃器（体が穴だらけになりました）、とどめは季利栖の回し蹴り（脳味噌とパンチラで心が揺れました）と怒涛の殺人フルコースを堪能してた。それでも起き上がる僕を見て彼女はアヒルぐらいなら飲み込めそうなぐらい口を開けて驚愕していた。そこから興味をもたれ、今のように、どうしたら致命傷を与えられるか実験されている。（こいつっ絶対ドSだ！）

僕の体は特別製。いや、僕だけではなく一族が特別。

僕らは不死身だ。

どうしてこんな体なのかはわからない。しかし、不老ではないので成長スピードは一般人と同じ。違うのは老衰以外では死なないということ。首が飛べば拾ってくっつければいいし、脳や心臓になにかしらの致命傷を与えられても大丈夫。一部例外はあるけど、ほとんどの事では死ぬことはない。もちろん傷ができれば痛いが、痛覚もほとんどなくなっているので、少しのことなら痛みも感じない。それを利用して親父は危険な仕事をいくつもやっている。お袋は旅に出るといってからまだ帰ってこない。あ、お袋は一般人なので不死

身じゃないよ。
こんな世界に僕たちは住んでいる。

何キロ引きずられただろう。もう服もボロボロで裸も同然。ロープは途中で切れたので今は家に帰る途中である。一様県道なのだが、ここは田舎町。ほとんど車が走っていない。だが、今回は少し様子が違った。

（なぁんかパトカーが多い気がする）

十五分くらい歩いている間に十回もパトカーを見た。

「今朝のニュースの関係なのか？だとしたら恐い話だ。うちには来るなよぉ」

なんでも、あるマンションの一室で猟奇殺人が起こったらしい。遺体は二人の姉妹。とてもひどい状態だそうだ。
そんなことを考えていると前から季利栖がやってきた。

「・・・やっぱりなんともないのね。なんなのその体は」

「だから言っただろう。こういう生き物なんだよ。町内の人はみんな知ってる。それ以外は普通なんだからあまり気にするなよ」

「そういうわけにはいかないんだけど・・・これは使えるわね」

ツリ目の瞳がキラーンと輝いた（というよりなにかが切れた音にも聞こえた）

「？」

「あんたってニュース見てる？」

嫌な予感しかしない。

「見てるけど・・・・もしかして」

「猟奇殺人の犯人。まだ捕まってないでしょ」

ヤヴァイ予感しかしない

「あ！そうだ！僕は今から夕しょ・・・」

僕の言葉を最後まで聞かずに季利栖は言った（言いやがった）

「その犯人、捕まえに行くわよ。言い暇つぶしになりそうだし」

「おいおい、いくらなんでもそれは現実的な考え方じゃないだろう。警察だって大きく動いてんだから邪魔になるようなことは」

「あなたが一番現実的な存在じゃないんだけど」

そりゃごもっとも。

「実はもう準備もできてるのよ。」

そう言って手をパンパンたたくとどこからともなくキャンピングカーが登場。運転手はあの黒い外人。（今度はグッ！って親指立てて

るよ・・・）

「早く乗りなさい。あなたも弾よけくらいにはなるでしょう。あとそのみっともない服を着替えなさい。それじゃあただの変態よ？」

誰のせいだ誰の。

こうして俺たちを乗せた車は隣の県の噂のベッドタウンに向かうことになったのだ。

## 下男2（後書き）

ここから先のことはまだあまり考えてません（^―^；）どうにか事件まで持っていこうとは思います。読んでくださってありがとうございますｍ（＿＿）ｍ少しは暇をつぶせましたか？（？―？）

## 下男3（前書き）

ここから少し事件に踏み込んでいきます。構想考えるのってこんなにしんどいものなんだね。楽しいけど。

# 下男3

ここからそう遠くない位置に小さい島がある。この島の人口は十五万人。マンションやアパートばかり建っているベッドタウンというよりベッドアイランドだ。
ほかの建物があるとすればコンビニやスーパー、病院のみ。美容院やゲームセンターなどもない。本島とは橋と船で行き来できる。ただ寝るためだけの島だ。
ここで殺人は起きた。
僕らは橋を渡り、島についてから約五分走り、問題のマンションに到着した。全十一階建の六階。

「しかし、見事にマンションだらけだ。しかもこのマンションのように高いものばかり」

「それはそうよ。本島は家よりも娯楽施設ばかり建てて土地がなくなっちゃったんだから。だからわざわざ埋め立てて住むところばかりの島を作ったのよ」

「しかしだ・・・それよりももっと不思議なことがある」

「？」

「なぜ僕らはこうも簡単に事件現場の部屋にこれるんだ？」

なんだそんなことかと季利栖は呆れ顔で言った。

「だってこの島には家からもお金をだしてるし、それに私は警察や軍の中に知り合いが大勢いるもの。このぐらいはちょろいわ」

（こいつの数少ない信頼できる人はそういうのばかりなのか？）

疑問は空を飛んでいるカラスにでも食べさせといて僕たちは問題の部屋に入る。

お金が多く必要な感じのするこのマンション。実際はキツキツの部屋割をしており、部屋の中は意外と狭い。ワンルームだ。

「部屋の中は事件のときのままだそうよ」

まず受ける印象は散らかっていないこと。

（争っていないのか？）

小物やぬいぐるみさえコケたり落ちたりしていない。ただ、異常なまでの

「血の量だな」

壁は血だらけだった。もちろん床も。机も。

「これは手慣れた奴の仕業だろうな。争った形跡もなく、ただ血だけが付いている部屋。首をやられたっていうのは頷ける」

「ただ、ひとつだけ気になることがあるのよ」

手を顎に当てながら季利栖は言った。

「これ見て。窓」

「？」

言われたまま僕は窓を見に行った。ただの窓以外には見えない。

「これがどうしたって言うんだ？」

何言ってんだこいつと思っていたら季利栖も同じことを思っていたらしく、

「見てわかんないの？窓だけがキレイなのよ。それこそ血のひとつもついてない」

そういえば窓は指紋がないほどキレイだ。

床や壁、あげくには天井にさえ血はついている。なのにこの窓だけがキレイなのだ。違和感バリバリである。

「知り合いに聞いた話だと、凶器は刃物。それも空中に浮いたティッシュでさえ切れるほどの切れ味の。そして進入経路は不明。目的も不明。被害者は恨みを買っていたわけでもないらしい。だから怨恨でもない。謎だらけだわ」

目が輝いていやがるぜこいつ

「犯人の毛髪や指紋などもでなかった。ただの快楽殺人犯として警察は調べているらしいわ」

「ふーん」

現場にきてわかったのは血だらけの部屋と窓が異常にキレイということだけ。ほかの部屋、つまりトイレや風呂場なども調べたけどこ

れといってなにもなかった。
もうすぐ夜。
時間も時間なので僕たちは犯行現場から離れ、近くの空いていたマンションの一室に入った。もちろん季利栖のお金の力だ。

「これといった情報も手に入らなかったなぁ」

季利栖は運転手と一緒に夕飯の買い物に出かけて僕は留守番。暇なので事件について考えていた。事件の状況を思い出した時、

「あれ?どっかでこれに似た話を見たことがあるような気が・・・」

頭に引っかかったものを取り出そうと悪戦苦闘していると

「今帰ったわ」

季利栖が帰ってきた。手にはこの島唯一のスーパーの袋がぶら下がっていた。

「今から準備するから待ってて」

と言い、台所へ

「えっ料理するの?出来合いのじゃなくて?」

なんだこの母性スキルは!?

「今日は食べたいものがあったんだけど生憎売ってなかったから」

このお嬢が食べたいものだからなぁ・・・期待できそう!

時間にして約一時間。ついに料理が運ばれてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なに？これ」

「バター」

んなもん見たらわかる。理由はバターだけっていうことだ。

「これだけ？」

「そう」

偏食にもほどがあるだろ！まだファーストフードばっかり食ってるほうが体にいいわ！

「なぜにバター？てか売ってるだろ腐るほど！」

「だってシルクミルキーロードのバターなかったから仕方がないのよ」

シルクミルキーロードっていうのはそれひとつで家が一軒建つくらいの値段のバターである。

「じゃあなに？今までわざわざ原料の牛乳まで取ってきてバターを作ってたのか？」

「そうよ。これだけでだいたいのエネルギーは補えるわ」

こいつの頭はぶっ飛んでるのか？てかバターって一時間で作れるものなの？

いろいろ言いたいことはあるがせっかくの手料理？なのでありがたく頂くとする。
食事も終わり、ゆっくりお茶なぞ飲んでいると、季利栖が

「そういえば、スーパーに行った時、事件に関係しそうな噂話を聞いたの」

この話を聞くことにより二人は事件の登場人物へとランクが上がったことをまだ知らない。

## 下男3（後書き）

次より下男の物語を知ることになります。どうでしょう、少しは暇を潰せましたか？

## 下男４（前書き）

久しぶりです。いろいろ忙しくかなりかかりました。皆さん、僕を覚えていますか？

# 下男4

「どんな話なんだ?」

お茶を啜りながら季利栖に尋ねる。

「スーパーのレジの人に聞いたんだけど」

ある大学生のAさんが終電を過ぎてしまって帰れなくなったBさんを家に招待しました。Aさんの家は景色がとてもいいと評判だったマンションに住んでいたのでBさんは楽しみにしながら家に向かいました。

家についたBさんは早速ベッドの反対側にある大きなベランダの窓から外を眺めました。するとBさんは

「今からコンビニ行こう」といいました。Aさんは

「ええぇ!帰ってきたばっかりだよ!?飲み物も食べ物も冷蔵庫の中に入ってるから別に買わなくてもいいよ」

といったのですが、BさんはしつこくAさんを誘いました。Aさんは根負けし、ぶつぶついいながらも付き合いました。玄関まで着き、自動ドアをくぐり、さぁ行くかと移動し始めました。ですがBさんはコンビニがあるほうと反対の方向に歩き始めました。AさんはそっちじゃないよといったのですがBさんはいや、こっちといって黙々と歩き始めました。さすがのAさんもなにかおかしいと感じ、Bさんに訪ねました。

「どうしたの?一体なにがあったの?」

「ここまでくれば大丈夫か」

Bさんはそう言い、Aさんの質問に答えました。

「実は私が窓を見ると、窓にベッドが写って・・・・そのベッドの下にカマをもった人が隠れてたの。あそこで言うと殺されると思ったから、外に出て知らせようと思って。今向かってるのは交番」

「という話よ」

季利栖もお茶を啜る。

なるほど。それでピンときた。季利栖はそんな僕の顔を見てなに？と聞く。

「いやなに。季利栖が帰ってくるまでの間、事件のことを考えてたんだけどね。似たような話を聞いたことがあるなぁと思ってたんだけど、それだ」

「ただの噂話ではないみたいね」

自分が初めて聞いたことをなぜか僕が知っていることを疑問に思っているらしい。

「そりゃそうだ。これは都市伝説だ」

お茶のおかわりを注ぎながら言う。

「世の中の噂でできたジャンルが都市伝説。笑えるものから社会現象までになったものまで様々なものがあるけど、今回のその噂は下男、またはベッドの下っていう話だね。」

「ただの噂話でしょ。事件には関係ないわ。私は今回の事件の場所や間取りが似てるなと思って聞いただけ。ただ・・・・」

形のいい眉を寄せて話す。

「この噂はいきなり広まったらしいの。都市伝説自体私だって初めて聞いた。それがここ最近で広まるっておかしくない？しかもピンポイントなところがある話だし。」

季利栖が考え込んだ顔をしている横で、達也はすっきりした顔をしている。そのことで季利栖は苛立ちをみせた。

「・・・なにか知っているような顔ね。今話したら許してあげるわよ」

「はい、すいませんごめんなさい！！！だから包丁を抜いてぬいて

ぇぇぇぇぇ！でちゃう！いろいろ大切な思い出ごとでちゃう！！」

どこからか取り出した包丁をしまい、季利栖は尋ねる。

「今回の事件となぜか一致することの多いこの噂。なにかカラクリがあるのかしら？」

さすがに話さないとサイコロステーキにされそうなので達也は話し出す。

「僕の父が危ない仕事をしていることは前にも言ったね。この事件はある物質によって起こったものだと思う。それはＭＩ（ミィ）というものだ」

「みぃ？」

なんのこっちゃみたいな顔をしている。

「そう。このＭＩはどこから発生しているのかはまだわからないみたいだけど、これが人の一番強い感情に反応してそれを具現化するものらしい。

世界各地で起こる謎現象はこの物質によるものだ。例えば奇跡の生還とか、地獄のような事件とか幽霊もね。もちろんそんなことが日常茶飯事だと世の中むちゃくちゃになるから条件があるけど」

「なに？その条件って」

「それは簡単。感情の量と質だ。同じことを願う人が多ければ多いほど反応する。質っていうのは重さだな。なんとなく分かってると思うけどわかりやすく言うね」

自分の父親の仕事の話をするのはなにか、恥ずかしい感じがするが、なんでも知っている季利栖に説明するのは気持ちがいい。

「十キロ入る箱に一個一キロのボールを十個入れての十キロが量のこと。一個十キロのボールひとつ入れることが質だ。だから時にはひとりの感情でＭＩＩが反応することもある」

これでＭＩＩの説明は終わり、と一区切り入れて茶をしばく。そこで季利栖が

「じゃあ、今回の事件はＭＩＩが関係してるってこと?」

「そうゆうこと。噂話がみんなに同じ感情を持たせて、それによりＭＩＩが反応したんだろう。まぁ確定ではないけど。あと誰が噂話を広げたかも疑問だね。明らかに狙ってやってるだろうし」

きちんとした事件の可能性も否定はできないが、あの部屋の惨状からは、確かにＭＩＩの可能性もある。そのことを考えていた季利栖が疑問を抱く。

「ところで、なんでＭＩＩって名前なの?なにかからとったの?」

やっぱきたかと達也は話す。

「あぁそれはね。父が母にそれを言ってほしかったからだよ」

「?」

今度はどゆこと?みたいな顔をしてる季利栖。

「ほら、ＭＩＩって猫の鳴き声みたいじゃん？父はそれを母に言わせたい一心でその名前をつけたんだ。いやぁ変人がすることはわからないね。そうそう、季利栖が言ったときとてもかわいかったぽぁ！」

口の中に高速で入れられた手榴弾が爆発して、僕の頭は花火になりました。

## 下男４（後書き）

少しずつ世界観がでてきたかな？まだまだ出してないものとかもあるんだけどそれは機会をみて出していきます。どうですか？少しは暇が潰せましたか？

## 下男5（前書き）

今だにマンションでグダグダしています。

## 下男5

「そのＭＩＩの濃度とかその存在の証拠とかほかにも説明がほしいのだけど」

季利栖は今だＭＩＩの存在を信じていないらしい。

当たり前の話だが。

「濃度は確かに関係するけど、詳しく測定できる物がまだ完成してないからなんともなぁ。あるかどうかくらいなら測れるらしいけど。あと散布領域は世界各地らしいよ。実際に行って調べたらしいから」

うちの父上がです。

「それでよく今回の事件がそれのせいだと確信できたわね」

季利栖は呆れているらしい。

「まぁ事件の状況からありえるなぁと思っただけだよ。ていうか流れに乗っちゃったけど、僕はあんたに物申す！！」

今回の僕は今までの僕とは違います！だって前回、頭飛んだもの。

ありゃあびっくりした。

「その薄着のどこから手榴弾だしたんだよ！心臓止まるかと思ったわ！」

「普通それではすまないわよ？死んで当たり前のことをしたんだから」

涼しそうに言うこの女は一回絶望与えたほうがよろしいかしら？

「一様言っておく。俺だって、痛いの！泣くの！引き篭るの！大体勝手にこんなところまで連れて来ておいてやってることといったら！

一つ、殺人現場の検証

一つ、バター食う

一つ、ＭＩＩの説明

一つ、頭飛びます

僕は帰る！絶対帰るからな！何も得るものがねぇ！」

滝のように泣くとはいいません。流星群のように泣いています！

「私は予定通りに進んでいてとてもいい気分だわ」

お茶を啜りながら気楽に言うこの巨乳。

「だろうさ！だが！俺にはなんの得もない。実家に帰らせてもらいます！」

こんな所いてられるか！とドスドス音をたてながら玄関に向かう僕。たとえ、あの外人に雑巾にされようが季利栖の張ったトラップに引っ掛かろうが知ったこっちゃないのです。何人たりとも神でさえ、この僕の進軍は止められま

「さて、お風呂にはいりましょうか」

しかしだ君！僕は神は嫌いだが、女神は大好きです！いいよねヴィーナス。

「お見送りはできないけど気を付けて帰りなさい。っていってもあなたには意味ないわね」

そういって風呂場に行く季利栖。

実はこの風呂場。鍵がないのです。この状況、天が我に与えたもうレッツ☆ご・褒・美！いえいえ覗きません。そんなことしたってどうせオチは見えています。そしてなにやら布の擦れる音が☆もう、こんなことならカメラ持ってくるんだったん。そしてシャワーの音。こっちの心の準備はバンタン！

しかし、油断は禁物です。なぜなら、季利栖は呼吸するかのようにトラップをしかける女軍人！こちらの予想を超えた配置でトラップはあるはず。だから僕は考えましたよ。そして考えついた方法は！

「突貫じゃあああぁぁぁぁぁぁぁああああ！！」

うおぉぉぉと風呂場にダッシュ！まず脱衣所！季利栖が脱いだ服を発見！直ちに回収します！（シュラン）という音と共に頭が落ちました。しかああぁぁし！それぐらいで参る僕ではなああい！落ちた頭を掬い取り、そのまま風呂場のドアノブを回す！（ズバババババ）高圧電流とはちょこざいな！（ドッカァァァン）地雷もなんのその！扉を開け、頭を放り投げる！頭が胴体の方を見たとき、体は炭になりながらもグッドラックポーズ！任せろ相棒！今あいつの裸体をこの目に焼き付けてくるからな！

そして・・・季利栖を発見しました大統りょーーう！！

まず、大きな胸！若いから形もしっかりしています。そしてお腹。ムキムキではないがアスリートの如きスラッとした体。そしてヒップ！オーケー。そして・・・

闇魔様も思わず吐き出す折檻ショーの始まり始まり。
目に指を突き立てられ、頭は軍用ナイフでまっぷたつ。脳みそを踏み付けること約百回。危うく排水溝に流れるところでした。さすがに脳や心臓の回復にはある程度の時間が必要です。気づいた時には体中ロープでグルグルミノムシ状態。そのまま朝を迎えました。

朝食を食べ（バター）、これからどうするかを考えているとき。季利栖の携帯が鳴った。携帯で誰かと話す季利栖。
そして携帯を閉じた。

「誰から？」

「知り合いの刑事。また同じような殺人が起こったって」

「現場の状況も聞いたんでしょ」

尋ねる達也。

「ほぼ一緒。ただ被害者は男の人だったのと、被害者は一人だけ。それぐらいの違いしかないわ」

今までの流れから達也は考える。

「それじゃあ、別行動をとろうか。多分夜しか犯行は起きないだろうから今日一日それぞれの観点で見ていこう」

達也のやる気に季利栖は顔をしかめる。

「あなた、昨日は帰るってダダこねてたじゃない。どういう風の吹き回し？」

その問いに達也は

「ん？いいもの見せてもらったからね。そのお返しだぴゃ」

マンションの一室から銃声が鳴り響いた。

## 下男5（後書き）

次には二人が活躍する予定です。・・・・多分。
皆様、暇が少しは潰れましたか？

## 下男６（前書き）

異形のモノの形がでてきます。
結果として、あまり主人公たちは活躍しておりません。

# 下男6

ふたりが分かれて調査したその日の夜。同じマンション郡のなかのひとつ。そこに帰宅するひとりの女性。水木七（みずきなな）。

二十代後半の彼女は見た目はかなり、老けて見えた。毎日の仕事。一人暮らしの寂しさなどのストレスが全身から滲み出ている。彼女が歩く道の街灯は彼女の疲れた様子をさらに濃くしている。

この島唯一の出口の橋。その中を走る電車の終電でやっと帰ってきた彼女は、すぐ近くのマンションの五階に向かう。

エレベーターで上に登りながら今日の晩ご飯を考えている。

（カップラーメンでいいか）

疲れてるのに家事なんかしてられるかと心の中で毒づく。目的の階に着き、端っこの部屋に鍵を開けて入る。そこは十二帖ほどの部屋。ベランダと部屋が窓で繋がっていて、ベッドがその対面にある。ベッドに座って景色をみながらビールを飲むのが一日の中で一番の楽しみなのだ。冷蔵庫からビールを取り出しベッドに座る。

明日は休日なので風呂は後。缶の蓋を開け、一口飲む。シュワーっとくる炭酸と苦味のある小麦色の液体が喉を通る。口を離し、何気なく窓を見る。今日は友人と飲む予定だったが、仕事に手間取り、またの機会になった。

少しつまらない気もするが、別にいいかと缶を傾ける。そしてまた窓を見ると

「ん？」

外が暗くて中が明るいと窓に部屋が鏡のように写る。しかし、疑問に思ったのはさっきよりも部屋がより鮮明に写っていることだ。ま

るで本当の鏡のように。
しかし、七はそんなもんかと気にしなかった。アルコールもまわってきているのもその原因である。そして、

足に、何かが当たった

なんだと屈んで見てもなにもない、ただの暗い空間だけだ。
しかし、冷たい温度と硬い感触。確かに足の踵に残っている。
そもそも、もし何かが入っていたとすること自体がありえない。ベッドの下には収納ボックスがくっついているのだ。
何かが入る隙間は蟻ほどしかない。
これも気のせいだと完結させる。

「酔っ払ったかな」

酒を飲んで体が熱くなって来たので窓を開けようとベッドから立ち、窓に向かう。
今日は良く晴れた日だった。
空は快晴だったが、仕事はうまくいかず。
気持ちまでは晴れることはなかった。
ストレスを発散するために、友人を誘ったのだがしつこく考えてもしかたがない。
今はアルコールに酔おう。窓に手をかけたとき。

気づく。ベッドの下の異形を。

「！！！！」

ハッと後ろを向く。今まさにベッドの下から何かが這いずり出てくるところだった。

まず手。指先から手首までびっしりと爪が生えている。かすかに手のひらも見えたがそこも同様に爪が生えている。

七はその時点でこれが人間であることを否定した。

右手には農具の鎌が握られている。頭はまるで何かにしつこく殴られてたようにデコボコ。髪の毛は数えるほどしか生えていない。

顔が見えた。顔の半分が口。残りの半分は一つの目で埋まっている。その異形がおもむろに口を開けた。口の中にはぎっしりと歯が生えている。

口の中のいたるところに歯が生えているのだ。内ほほや歯茎、舌にまでびっしりと。

体つきは四十代の男。男かどうかも怪しいが第一印象が男だと感じた。

足にはところどころから赤ん坊の手のようなものがいたるところから生えている。

素っ裸だが、性器はない。

ズルリとベッドの下から出てきた異形は男と女の声が合わさったかのような声でブツブツ言っている。

七はとりあえずここから逃げないと、と考える。しかし、体は震えて力が入らない。

むしろ力を入れないと立っていることでさえ難しい。そして出口は後ろのベランダか玄関。ベランダは五階に住んでいるのでどうしようもない。
玄関は異形がいる横をすり抜けることで行ける。でも、あの気持ちの悪いモノがいるのでは近づくことは考えられない。
自分の人生を諦めたくないが、もうベランダから飛び降りるしかないと考え始めた時、

玄関から轟音が響いた。

「！なに！今度は！」

これ以上自体が悪くなるのではと震える体と心を支え続ける七。もう意識も朦朧としてきた。そこに

「大丈夫ですか水木さん？」

二十歳ほどの男が入ってきたのを見た。七からすれば、この場面で若い男が入ってくるのが不自然でならない。だが、あの化け物みたいなものでなかったことで少しホッとする。
気が緩んだのが原因。体の力が一気に抜け、座り込んでしまった。立とうと思っても、既に体が限界だったらしい。一向に力が入らない。それを好機と見た異形が遅いかかる。
意外と素早く、あと一歩という距離まで近づいた。七は完全に諦めた。あの男の子が助けるには距離がある。どう頑張っても間に合わない。
目を閉じ、死を覚悟した。しかし、なにか、水音と鈍器を床に落とした時の音が混ざったようなものが聞こえたあとに、壁から轟音が

なった。
無意識に目を開けてしまって見てみると、

男の子が片手でベッドを持ち上げていた。

あの怪物は見えない。どうやらベッドで殴られ、壁に叩きつけられたらしい。男の子の腕力に驚きを隠せないでいると突然意識が途絶えた。
目の前から怪物が消え、誰かに助けられたと少し思っただけで、脳がブレーカーを切ったのだ。そのまま、七は床に倒れた。

「あれ？気絶しちゃったかな」

達也は七に近寄り、怪我の有無を確かめる。

## 下男６（後書き）

次は下男ラストに向けて突っ走ります。
・・・多分
どうです？暇つぶしくらいにはなったでしょう？

# 下男7（前書き）

ついに活躍します主人公達。

# 下男7

怪我がなさそうなので七を担いでこの場から離れようと達也は動き出す。
正直怪我ひとつないのは奇跡に等しかった。
目線は今しがた出来た穴を見る。
吹き飛ばしたモノはこの事件の犯人なのだろう。
いろいろ考えている間にも復活しそうなので、予定通り七を担ぎマンションを出る。そんなに広くない部屋なので、あと三歩も歩けば壊してしまった玄関につく。
しかし、後ろで何かが動く音が聞こえた。
振り向くと異形が立ち上がり、こちらを見ている。

「あいつの速さなら、僕が玄関を出る前にまっぷたつだな」

自分は平気だがこの人はそうはいかない。
一旦七を降ろし、その前に身構える。
狭い廊下で両者は激突した。

両者の距離は約五、六歩。
異形は走るというより歩く感じでこちらに向かってくるが、速さが尋常ではない。
まるで、スケートをしているように移動する。
爪だらけの右手に握っている鎌を横に構え、そして振り抜く。
達也は後ろに下がって避けたいのだが、七がいるのでそれは適わな

い。
いくら、不死といっても痛いし怖い。そこは普通の人間と同じだ。
ガクガクする足を無理矢理前に出し、鎌を振り切られる前に腕を止めた。
しかし、

「ぐうぅ！」

異形の腕は爪がぎっしり生えている。
針山のような腕。
そのせいで、受け止めても爪が刺さるのだ。
受け止めた左手から血が流れる。
蹴り飛ばして距離を取ろうと足を上げようとしたが、いつのまにか異形の足に生えている無数の手によって足は掴まれている。
その力も強く、指が足に突き刺さっている。
両者組み付いたまま動かない。
額には汗。手と足からは血が滴って床を汚す。
達也は意を決して足を無視し、異形を持ち上げた。

「うごおぉぉぉぉ！」

さながら重量上げのように異形を両手で天井に持ち上げる。
足からはぐちゃっという音と共に、手が離れた。その手には達也の足の肉が掴まれている。
痛みを感じ、涙を流しながら達也は異形を向かいの部屋に投げた。
異形は自分が移動してきたくらいのスピードで飛び、部屋の壁にぶつかった。
轟音と一緒に壁に穴を開け、異形はそのまま五階から落下していった。

「はぁはぁ・・・・いったー」

足を抑えかがみ込む。もうほとんど治っているが、痛かったのは確か。もう傷もない足を抑えながら七の無事を確認する。
まだ気絶しているようだ。傷もない。
守りきったことを確認し、また七を担ぎ外に出る。
外はとても蒸し暑かった。
今まで背筋が凍るような体験をしていたので気付かなかったが、今日はとても暑い。
エレベーターに行こうと歩いていると、下から声が聞こえた。

「ん？」

覗いて見ると季利栖がいた。
季利栖は達也がいるのを確認すると、すぐ近くの非常階段で登ってきた。
到着まで約五秒。スペック高すぎである。

「とても嫌な音が聞こえたから来たのだけれど・・・・誰？それ」

肩に乗っている七を指さす季利栖。

「事件の被害者だよ。今しがた襲われてたのを助けたんだ」

さっき起こったことを話す達也。
正直こんな薄気味悪いところは早く移動したかったが、季利栖が来てくれたことで少し安心し、饒舌になっている。

「にわかには信じられないわね」

腕を組む季利栖。

「なんなら部屋見てこいよ。すごいことになってるぜ」

半分は自分のせいだけどと心の中で思う。

「確かにそれも信じられないけど、あなたが活躍したことが信じられないわ」

そこですか。

「不死身だからね僕は。死にはしない」

少し自慢げに話す達也。

季利栖が達也を七ごと五階から突き落とした。

「！！」

びっくりしている暇もなく、達也は肩に担いだ七を胸に抱くようにしてアスファルトに激突する。

肉がひしゃげる音が聞こえたあと、何も聞こえなくなった。

それどころか目も見えなくなったことから、頭が潰れたと理解した。

季利栖は見た。
今話している達也の後ろにヒトではないものが立っているのを。
それは決して直視してはいけないモノだった。
それは達也が五階から投げ落としたモノと瓜二つ。
達也から話を聞いていた季利栖は、こいつが犯人だと理解した。
動く。
先手必勝と季利栖は相手めがけて走る。

季利栖は誘拐などの犯罪に多くあってきた。
信じたものに裏切られ、助けてもらった人に拉致されかけ。
自分の身は自分で守る。
それが季利栖の結論。
いろんな訓練を行なった。格闘技、軍隊。路地裏でのケンカ。
年頃の娘がただ、強さだけを求めた。
そしてその力を今、遺憾無く発揮する。

異形の懐に入る直前に、相手は鎌を振るう。
それを同じスピードで回転し、鎌を流す。
髪を少しもっていかれた。
鋭い切れ味。
回転の遠心力を利用し、相手のみぞおちに肘を入れる。
人間であればその場で昏倒するほどの一撃。
しかし相手は異形。今までの人間の感触とは程遠く、手応えがない。
直立不動のままの異形は、視界外からの頭突き。
体が伸びたかのように形を変えて、季利栖の頭頂部を狙う。
季利栖は蹴飛ばした反動で離れようとした。
しかし、
達也と同じく足を掴まれている。

体つきは一般の女の子変わらない季利栖は逃げる術がない。
思いっきりもらった。
異形の頭は思ったより固く、またザラザラしていた。
目の前が光ったように季利栖は感じた。
血が滴り落ちてくる。
意識が飛びそうなのを必死で堪える。
一撃で足は震え、息が上がる。
そのスキを見逃さない異形。
右手の鎌でキリスの肩を切りつけた。

「　　」

声にならない声を上げ、季利栖の左腕が切り落とされた。
左腕はすぐ足元に転がっている。
その腕は次第に飛散る血によって完全に真っ赤に染まる。
尻餅を着き、左肩を抑えていると左足が飛んだ。

「！！！！！！！！！！！！！！！」

息が詰まったように喘いだ。
左足の膝から下が手すりから落ちていった。
来ているワンピースも真っ赤なドレスに染まっている。
まさに地獄にいるよう。
だが、まだ死にたくない。

その思いで髪を縛っていた紐で左肩の止血を行う。
激痛な常にある。
幸か不幸か、そのおかげで気絶はまぬがれている。
左足は右ポケットにあるロープで止血。
しかし、異形は待ってはくれない。
鎌を振り上げ、次の手足を狙っているようだ。
振り抜いてきた瞬間に季利栖は右手だけで移動。
狙っているところを先読み、あえて鎌を持っている方へ動く。
先回りすることでなんとか躱すことができた。
しかし、以前右足は捕まったまま。
先の一撃は右手狙いだったのでなんとか避けることができた。
だが、右足なら逃げ場はない。
すでに、意識は朦朧としており、右手も震えている。
左足の止血もまだ終わっていない。

（もう無理ね）

季利栖は生きることを諦めた。
異形は次は躱されないように右手を抑えている。爪だらけの手は季利栖の腕に突き刺さる。
そして鎌を振り上げる。

（こんな終わり方になるとは思わなかった。今まで頑張って強くなってきたのに。全然役にたたなかった。まだやりたいことや知りたいことがいっぱいあったのに。
・・・達也君は逃げ切れたかしら。せめて、あの子が逃げ延びてくれないと死に存よね。あ、そういえばあの子、不死身だったわね。まったく。最後の最後であの子のことを考えるなんて。ほんとに）

「馬鹿みたい」

鎌が降り下ろされる。

季利栖は目を瞑った。もう何も見たくないと。

目の前にいるのは異形のモノ。最後は馬鹿みたいな思い出に浸りながら死にたい。

しかし、一向に降り下ろされる気配がない。

もう死にかけの自分にはそのこともわからなくなってきたのだと考えたが、いくらなんでも何も感じないのはおかしい。

それに、まだ右手の感触は残っている。

開けたくはなかったが恐る恐る目を開けてみると・・・

異形が笑って鎌を季利栖の顔に振り下ろした。
ぐしゃっという音と共に視界が黒く染まった。

## 下男7（後書き）

さて、どうなることか作者にもわかりません。
暇つぶしに小説などいかがですか？

**下男8（前書き）**

続きです。どうぞ。

# 下男8

やっと回復した達也は七を抱えたまま起き上がり、周りを見る。
ここはマンションの駐車場。点々と街灯が立っているだけのシンプルな造り。
殆ど埋まっている駐車場だが、うまくまだ使われていない駐車スペースに落ちたらしい。
少し考えたが七をここに寝かせて行くことにした。
アスファルトの上で申し訳ないが、あのバケモノのところに連れていくよりかは幾分かマシだろうと考える。
救急車を呼び、また戦場へと戻る。
ほんとはもう、関わりたくはないのだが季利栖がまだ上にいる。
すぐ近くの非常階段を登ろうと走っていると、階段近くになにか転がっている。
移動しながらもそれに視線を向ける。
街灯に映し出されるそれはとても見たことがあるものだった。
そして移動スピードと心臓の鼓動が急速に上がる。

（あれがもし、季利栖のなら・・・・クソッ！間に合え！）

達也は階段を二段飛ばしで登って行く。
頭の中は早鐘が鳴り響いている。
コンクリートで出来ている階段から、シューズの音だけが響いている。
人の声一つしない。
よく考えてみればおかしいことだ。今まで散々暴れているのに、七の隣の部屋の住人は出てこなかった。それどころか人の気配さえしないのだ。
部屋の中の明かりや、会話。テレビの音などあるはずの人工的な物

音がなに一つ感じられない。
薄気味悪いが今は季利栖を助けることだけを考えることにする。
駐車場から約三十秒で季利栖がいる廊下に着く。そこには
季利栖の死体が転がっていた。
両手両足を無くし、あれだけ凛々しかった顔も今では輪郭しかわか
らないほどぐちゃぐちゃにされている。
季利栖だったものの近くに季利栖のパーツがあった。やはり一つ足
りない。
どのパーツも赤黒く染まっている。
廊下は完全に血の海と化していた。
異形のモノは季利栖の上で腰を振っている。
達也は異形の頭を思いっきり蹴り飛ばした。
グシャっという音がした。異形は向かいの部屋の扉に激突。そのま
ま扉を突き破って玄関の壁に頭からぶつかった。
達也は季利栖を抱き上げる。それはとても軽かった。それが今の季
利栖の重み。
ただ、涙は出なかった。胸が締め付けられ、呼吸もままならない。
頭に酸素がいかず、現実感がでない。
なにも、死体を初めて見たわけではない。
しかし、あれだけふざけ合って、怒り合って、笑い合った友人が人
の形をギリギリで保っている状態にまでされたところを見るのはあ
まりにも残酷だ。
もう、季利栖は話さない。
もう、季利栖は僕を殺さない。
もう、会えない。

キレた。

達也は季利栖の腕や足を体に集め、その上に自分の服を被せた。

「俺の服で悪いが、我慢しろよな」

前を見る。そこには異形が玄関から出てきたところだった。
今は怖くない。
達也は全力で異形に向かって走った。

距離は約十歩程度。走って二秒もないほどの距離。
達也は異形の頭を思いっきり横から殴った。
肉を打つ音。異形は痛みよりもその勢いでたたらを踏む。
逆の手でさらに殴る。殴る。殴る。
頭を掴み、顔に膝を叩き込む。
衝撃で仰け反った異形の顔に狙いを定め、大きく振りかぶりもう一発殴る。
またしても異形は吹き飛んだ。
向かいの玄関に背中からぶつかる。
達也はある人間を超えた力がある。
それは筋力。
通常、人間はＭＡＸの三十パーセント程度の力しか使えない。脳が体を傷つける強さを無意識にセーブするからだ。
しかし、達也は不死身。その抑制は元々存在せず、いつでも百パーセントの力を出せる。
なので、一回一回、達也の拳や足は傷ついている。生まれながらの回復力のおかげで戦ってきたのだ。

「！！」

異形は立ち上がる。ダメージを受けたようには見えない。
異形は一瞬で達也に詰め寄り、鎌を振るう。

「うお！」

咄嗟に屈んで避ける。
筋力以外の身体能力は一般の人と変わらない。
避けられたのは奇跡だ。
体制を立て直す暇なく、異形は鎌を達也の顔めがけて振るった。
肉と繊維を切る音が達也の耳に届く。

「ごおあぁぁ！」

目をもっていかれた。
両目を斬られた達也はその場で膝を着き、屈んだ。
目を抑えた手から血が滴る。
何も見えない。痛い・・痛い・・・痛い痛い痛い痛い！
頭の中は真っ白になった。
ただただ、激痛にのたうち回る。
異形の顔が笑顔に変わり、鎌を達也の背中に突き立てた。
ビクンと無意識に体が仰け反る。
そのまま、ヌイグルミの背中のファスナーを開くように、突き刺した場所から一直線に鎌を走らせた。
肉は裂け、背骨が見える。背中から噴水のように血が飛散る。

「　　」

声にはでない叫びが夜のマンションに木霊する。
しかし、達也は不死身。
目はもう見えるようになってきており、背中も徐々に傷口が閉じていく。
だが、痛みが達也の心を折った。
異形はなかなか死なないのを嬉しがっているのか、大いに笑ってい

る。
その笑い声は、ガラスを引っ掻いた音よりも精神にくる。
沸騰していた頭は冷え、体からは力が抜ける。
達也は完全に地面に倒れ伏した。
自分でもあっさりと気力をなくしたなと達也は情けなさに歯を食いしばる。

（季利栖を守ることも・・・七さんを助けることもできなかった。
なにが不死身だ！なにが無敵だ！結局は死なないだけのただの人間。
特別な存在なんかじゃない。）

自分で自分を否定する。

（今までいろんなことに関わってきて、少しはマシな男になったと思ったら・・・このザマだ。）

ここまできたら、負の感情は止まらない。

（死なない体がこんなに不便だと思ったことはない。今すぐに死にたい。季利栖の元に行きたい・・・だが）

しかし、達也はこのバケモノを消す可能性がまだあることを知っている。

（こいつを消さないと季利栖に殺される）

左手から動き出し、右手も地面に手をつく。
恐怖から両手は震えている。しかし

（こいつを消さないと季利栖は笑わない）

足も順に膝をつく。

（なにより・・・こいつは許せない）

膝立ちになり、ついには

（ぜっっっっっったいにぶっっっっっころす！！）

立ち上がる。

異形はまだ遊べるのかと嬉しそうに鎌をクルクル回している。

そして、飛びかかってきた。

距離を取りながら達也はいなしていく。そして考える。

（こいつがここに長いこと存在しているということはここのＭＩＩが濃いか願いが濃いということなんだが）

横なぎの一閃を後ろに飛び、腹を浅く切られた程度におさめる。

体制が崩れそうになりながら、達也は致命傷を避ける。

（二択のうちひとつは正解のはずだ。ならＭＩＩが濃いほうに賭ける！）

達也は時間を稼ぐため、行き止まりまで相手を誘い、無造作に振り回している鎌の中に勇気をもって飛び込む。

切られながらも異形のど真ん中に渾身の拳を食らわした。

## 下男8（後書き）

加速度的に進みます。
暇つぶしにいかがでしたか？

## 下男終（前書き）

下男篇ラストです。

# 下男終

肉の割れる音。
しかし、それは達也の頭からではなく、異形の鎌を持っている手から。
鎌は持っていた手と一緒に吹き飛んだ。
異形の絶叫。
血は黒く、まるで重油のようだ。
臭いは生臭く、咳き込むほど。
達也は受け止めた右手を見る。
右手は赤く染まっている。まるで血のようだが、自分のものではない。しかし、達也はそれが誰の血なのかわかる。

「ありがどう、季利栖」

悲しい笑顔をしたあと、目の前の敵を鋭く睨む。

「こっからは倍返しだ。楽に死ねると思うなよ」

そこからは、一方的。殴る殴る殴る。
異形も反撃してくる。噛み付き、引っ掻き、殴る。
しかし、いくらダメージを受けても達也には効果はない。
形勢は逆転した。
殴ったところははじけ飛び、重油のような血が飛散る。
そして脳みそを割るような絶叫。
なにも気にせず達也は殴り続ける。
肉を打つ音と絶叫のコントラストが響く。
季利栖のこと、自分のこと。もはや、他の犠牲者のことは頭にない。
自分の怨みだけで戦っている。

そしてついに異形は顔だけになった。

「どうだ？一方的にヤラれる気分は。体をバラバラにされる気分は。血が無くなる気分は。」

怒りに歯止めが効かない。

「これで終わりだ、バケモノ。」

達也はゆっくりと右手を異形に近づける。
それは何かを油であげるような音。
触れたところから白い煙があがり、溶けていくように異形の頭が失くなっていく。
いまだに異形の絶叫は続いている。
達也はそれを楽しそうに聴きながら、最後のヒトかけらまで、丁寧に消し去った。

夜の静けさが戻る。
電灯のジーっという音と風の音。
そのなかで一人。達也だけがいる。
体の傷はとっくに癒えている。
ダルそうにゆっくりと右手を見る。
手は震えていた。
右手の血は、もう消えていた。地面に染みをつくることもなく。
いつもならすぐに回復する体力も全然戻らない。
完全に終わったと脳が決断し、膝から崩れるように倒れた。

「はぁはぁ。終わった。終わったよ季利栖。敵はとった」

満身創痍。
今日一日で遭遇と撃退を行なったのだから当然だ。
熱帯夜でも冷たい床は、とても心地がいい。
そのまま眠ってしまいそうになるが

ガタッ

音が聞こえた。
今まで何があっても他の住人が出てくる気配はなかった。
なら、一体誰？

七の部屋から向かって右手の二つの部屋から

異形が出てきた。

今までの三つの事件は一人の犯行だと思っていた。
しかし、現場の状況が似ているだけで同一犯とは言っていない。

「はは・・・は」

笑うしかない。
ＭＩＩの影響か、未だに体力は戻らない。このままでは永久に嬲られることになる。
誰にも気づかれず、助けにこず、ただただ苦痛と絶望だけの日々。

「死ねないってのは・・・強みにはならない・・な」

この状況で達也はこれまでの人生を振り返っていた。全てが綺麗な思い出だけではないが、思い出すだけで嬉しくなるような思い出ではあった。

（死なくても走馬灯って見られるものなんだな）

考えるほどに顔は引き攣れていく。手足は震え、涙がでそうになる。かっこよく決められるヒーローはほんの一部だけ。自分はヒーローにはなれない。どこまでいっても気が弱い生き物なのだ。

にじり寄ってくる最悪は鎌を高々と掲げ、嬉しそうに顔を痙攣させながら近づいてくる。

耳が突然聞こえなくなったかと思うくらいの静寂が訪れ、少ししたら絶叫と血肉が起こす音だけが響きわたった。

## 下男終（後書き）

次の相手を探しています。
四苦八苦の作業。でも楽しいです。
あなたの暇つぶしはまだ終わりませんよ。

## 一寸ババア1（前書き）

次の相手でございます。

# 一寸ババア1

ある事件が起きた。
ある一軒家での殺人事件。被害者はトイレで殺された。
凶器は刃物。それも針のようなものによって体中を刺され、抉られたらしい。
手掛かりは盗撮用のカメラ一台のみ。トイレは上に小窓があるだけ。
その小窓は人が通れる大きさはなく、トイレのドアも中から鍵がかかったままの状態で発見された。
眞鍋達夫（まなべたつお）は驚愕していた。
このニュースがテレビから流れてきたとき、心拍は上がり、冷や汗もでてきた。
なぜ、こんなことになったのかと何回も問うた。
達夫は犯人ではない。
達夫が焦っているのは盗撮だ。

達夫には家族がいない。年齢も五十になる。
仕事は問題ないのだが、毎日がとても退屈だった。
ある日、仕事から帰っていく道中で綺麗な女性とすれ違った。
達夫はその女性に一目惚れした。
この出会いで達夫の人生は楽しいものに変わった。
話しかけるほどの度胸はなかったが、いつもの帰りの時間に決まった場所で女性を見ることができた。
その時間に間に合うように仕事を進めることで働きぶりも変わった。
そのことで上司に認められ出世もした。
達夫の人生は上り調子になっていった。
しかし、不満もあった。
いつまでも見ているだけの自分。
いつまでも振り向いてくれない彼女。

その不満はやがて大きな欲求へと変わった。
もともと女性と話すのが苦手で遠くから見ていることで満足してきた人生。
なら、もっといろんなところを見ることができればこの欲求は満たされるのではないか。
そう考えた達夫は、盗撮用の小型カメラと信号を贈る機材、受信するアンテナと盗撮用のパソコンを購入。
出世もでき、お金はあった。
そして、女性をストーキングし、家を突き止めた。
女性の家は家族三人暮らし。
両親と暮らしているようだ。
家を知った次の日。
達夫はその家にトイレを借りることで侵入。機材を設置した。
彼女の部屋でもよかったのだが、両親の母親が彼女の部屋らしきところを掃除していたため、トイレに計画を変えた。
それが事件の前日の話しである。

警察がこのカメラを分析し、持ち主を即座に発見するだろう。
達郎は腹を括った。
警察が来る前に自首しよう。
初犯で自首すれば、結構刑期は軽くなるだろう。
そう考え、警察に行った。
近くの交番の警察に自首。そのあと、警察署に連れていかれ、事情聴取を受けた。
なにせあのカメラはデータをパソコンに送るので、カメラ自信に記録は残らない。
録画されたディスク達夫は持っていっていた。
彼が行なったのは犯罪ではあるが今回の殺人事件の有益な手掛かりになる。
すぐにそのディスクを再生した。

そこにはトイレに入ってきた被害者の女性が写っていた。
この映像を見ているのは捜査本部の刑事。
少しでもなにか手掛かりはないかと食い入るようにテレビを見ている。
そして、用をたした女性が立ち上がったとき

上の小窓がガラッと開いた。

女性はその小窓に視線を向けた。
その瞬間、小さな何かが彼女の口に入り舌を切断した。

（！！！！！！）

フガフガと叫ぶ女性。

トイレの床は切り落とされた舌と血で水溜まりができている。
女性はあまりの痛さにトイレに座った。口から出てきたのは

約三センチの老婆。

ありえない大きさの老婆の手には五寸釘ほどの縫い針。
その老婆は女性を
刺す刺す刺す

気が済んだのか老婆は行為を止めた。
そして血まみれのなかの女性の死体の上でしっかりと
カメラを見て言った。

「次はお前の番だ」

そこで映像は終了した。

誰もが固まっていた。
予想外の犯人。もはや人ではない。
誰しもが寒気を感じる中、

天井でゴトッと音がした。

# 一寸ババア1（後書き）

序章ですがいかがだったでしょうか。

# 一寸ババア2

場所は戦場。
ビルは朽ち、剥がれ落ちた瓦礫は地面を揺さぶる。
所々で炎が上がり、電線は紫電をまき散らす。
およそ、人などいないであろうこの場所で、一人、逃げ惑う者がいる。
服装から、中・高生。
そのような者がなぜ、こんな場所にいるのか。
いや、いることが当たり前なのだ。
ここは日本のどこか。
さっきまでここには、百をゆうに超えるほどの人がいたのだ。
そこに現れたのは数え切れないほどのバケモノ。
それは瞬く間に人間を切り、殴り、舐り、潰し、喰った。
機動隊、その後自衛隊も参戦し、街は戦場へと変わった。
事が起き、逃げ遅れた者がこの青年である。
彼はガレキに隠れながら、今なお止むことのない銃声の中をひた走っている。
汗とホコリにまみれ、所々擦り傷をつくりながら、奇跡的にも大怪我を負うことなく、彼は安住の地を求めて走る。

「いやだ・・・死にたくない。あんな死に方は御免だ」

どこまで行ったらいいのかわからない。
ただ言えることは、ここはだめだと言うこと。

「どこかで自衛隊が陣地を敷いているところがあるはず。そこに行けば助かる」

だが、その希望も走るごとに薄れていく。
なぜなら、道には一般人の死体と自衛隊の死体も転がっているからだ。
相手は人間ではない。
それが尚更、希望を打ち砕く。
いくつか見た戦闘は、それとは呼びにくいほどの一方的。
バケモノに弾丸は効かず、足止めにしか役に立っていない。
数も多く、弾が無くなったものからやられていった。
青年を助けてくれた自衛隊員も弾が尽き、死んだ。

「こんなの・・・現実じゃない。夢でも見ているようだ」

考えれば考えるほど焦りを生む。
焦りはポテンシャルを大きく削る。
案の定、青年は足を取られ地面に倒れた。

「ぐ!・・・いってぇ」

どうやら足をひねったらしい。
これでは走れそうにない。

ガコ

「!!!!」

何かの崩れる音。

地面を見ると、大きな影が出来ている。
ゾッっと背筋が粟立つ。
大きさから見て、転がっても逃げられる大きさではない。
体は無意識に頭上を見上げ、それがビルの一部であることを確認させる。
降ってくるそれを前に、頭の中は空っぽになり、ただ死を待つだけのモノになった。

だが、青年は強運の持ち主らしい。
横から何かがガレキを粉々に破壊した。

「！」

青年はしっかりと見ていた。
それをやってのけたのは、自分とあまり年齢の変わらない人物だった。
両腕が紫の炎のようなモノを纏わせている以外は、自分と同じ人間だった。
その男は青年に近づき、

「ここから離れろ」

酷く冷たい、冷静な声で話した。
服装は喪服。
ネクタイが黒のことを除けば若いサラリーマンのようだ。
靴がスニーカーなのが変なところである。
青年は慌てて礼を言う。

「あ・・・ありがとうございます。でも、足をひねってしまって・・

・」

男は視線を既に違うところに向けていた。
そこには、

一匹のバケモノが立っていた。

「！！！！！！」

青年は凍りつく。
その姿は、目の前で何人も殺した奴だ。
右手には農具の草刈がまを持ち、人とは思えない体型と顔。

「　　」

およそ、文字には現せないような声を上げるバケモノ。
それを見て、一切の反応を示さない男は、そいつに向かって走りだした。

距離はそよそ十メートル。
走れば二秒もかからない距離。
バケモノは迎えうつ為に鎌を振りかぶり、目の前まで来た男に振り下ろした。
男は避けようせず、直進。
一直線に走っていたので、横に避けることは難しい。
致し方ないのだろうが、青年はそれで死んだと確信した。

だが、頭に降りおろされた鎌を寸でのところで頭を振る形で避けたが、鎌は思いっきり肩に突き刺さり、そのまま右から左に体を切り裂かれた。

男から血が吹き出す。
だが、男は表情ひとつ変えず、バケモノの腹に右手を叩き込んだ。
肉に無理矢理ねじ込む音が聞こえる。
青年は思わず目を瞑った。

（・・・物音がしない？）

疑問に駆られ、恐る恐る目を開けてみる。
そこには既にバケモノの姿はなく、男が一人、立っているだけだった。

「倒した・・・のかな」

男は只々、立っている。
青年は、男が負った傷が心配になり、声をかけようと近づいた。
大丈夫？と声を出しかけたそのとき、

目の前に、数え切れないほどのバケモノの群れがあった。

地獄とはこういうことを言うのだろうか。
さっきまでのバケモノと同じものが、無数にいる。
数えれて、百、だろうか。
男を見てみると表情は無骨なまま。
普通なら頼もしく見れるだろうが、この数を見てからだと、逆に不安を煽る。
青年の足が小刻みに震える。
涙を流さなかったのは、がんばったほうだろう。

「僕の人生・・・ここで終わったな」

諦めの境地は逆に体の震えを止める。
ただ、たまには一人で買い物に行こうかと外出しただけ。
それが、こんなことになるなんて。
悲観にくれているところで、いきなり男が群れに向かって走りだした。

「！！。無茶だ！いくらなんでも多勢に無勢だよ！」

叫んでも、男は止まらない。
恐怖を感じないのか。または、理由があるのか。
男の足取りは微塵も恐怖をかんじさせない、堂々としたものだった。
男が群れと衝突する瞬間。

群れの中央で、大爆発が起きた。

その威力は離れていた青年をも五メートルほど吹き飛ばし、閃光で目に激痛が走る。
爆音による鼓膜へのダメージも大きかった。

「ぐぅぁあああああ」

背中を打った痛みと目の痛みで悶絶する。
徐々に耳が聞こえるようになってきたところに、

「ちょっと。君、大丈夫？」

声をかけられ、なんとか目で相手を視認すると
同じ黒のスーツを来た髪の長い女性が恐ろしく大きな銃のようなものを持って立っていた。

# 一寸ババア3

黒髪の長い女性に車まで案内され、そこからは目隠し。

「・・・機密っていうことですか」

「そういうこと。少し我慢してね」

そう言われ、何時間たっただろうか。
今は下へと下がっていく感覚がある。

（・・・さすがに地下ぐらいはわかるな）

かなり下っていく。そこに振動。

（止まった？）

「さぁ、降りて」

促されるままに車を手探りで降りる。
そしてやっと目隠しが外された。

「ここは」

「ようこそ。ＭＩＩ対策部隊、【幻想屋】へ」

ＭＩＩ？幻想屋？

「訳がわからない。一体ここはなんなんだ？」

見渡すとまるで防空壕。
昔、修学旅行で見たことがある。そこによく似ていた。
大雑把に掘った穴。
ただ、広さは異常。
軽く大型バスが何十台も入る広さ。
ざっとここにいる人の数は三十人ぐらい。
だが、あまりにも基地と言うには雑だった。
機材やモニターは見たこともないものが多く並べられている。ここは司令室のようだ。
画面には日本の地図。そこにいろんなマークが付いている。自分がさっきまでいた県（多分ここは県外だと思う）にもなにやら赤いマークが付いている。
まるで空港の管制塔のようだ。
それぞれの仕事が忙しいのか、働くもの皆、こちらに見向きもしない。
素直に基地荒れようの感想を言うと、

「それはそうよ。スポンサーなんて付いてないしね」

女性は軽く大きな銃を振り回す。
形はスナイパーライフルに近い。だが、スナイプするにはあまりにも無骨で大型だ。
少し歩き、唯一扉が付いた（トイレを除いて）部屋に案内される。
そこには白衣を来た男性が、長い机のえらい人が座る位置にある椅子に座っている。
歳は、大体三十代だろうか。白衣を来ている人は不潔なイメージがあったのだが、この人はヒゲは無く、顔も美形。髪型は・・・止めよう、泣きたくなってきた。
そういえば、案内してくれた女性の年齢は、僕と似ていると思うほ

ど、幼く感じる。
僕は、対面の椅子に座り、周りを見る。
黒服の男二人が白衣の男の後ろに銃を持って立っている。
壁にはびっしりと名前らしきものが彫られていた。

「さて、ここまで同行してもらってわるかったね。私がここの頭で、死骸（しがい）　骸（むくろ）だ。よろしく」

結構イケボイス。さすが美形。
しかしなんて名前だ。親の顔が見てみたい。

さてさて、向こうが名前を言ってきたのだから、こちらも名乗らないとな。

「僕は藤見　達也です。助けていただいてありがとうございました」

深々とおじぎをする。

「！！！」

ガタッと骸さんが立ち上がった。
何かに驚いているらしい。

「ええっと・・・どうしました？」

よく見ると、黒服の人たちも呆然としている。
後ろの女性も口が空いている。これこれ、女の子がそんなに口を開けるものではありませんよ。

「もしや・・・君の父親の名は・・・」

「ああ、藤見（ふじみ）　自切（じきる）です」

「やはりな・・・。これは運命だな」

骸さんは座り、手を机の上で組んで、質問を投げかける。

「単刀直入に聞こう。自切博士はどこにいるんだ」

「いえ・・・知りません。よく、家を開ける人でして。何ヶ月も帰ってこないのはザラなんです」

「なら母親は？」

「そっちも同じです」

この人達、両親を探しているのか。なぜ？

「疑問に思うのも無理はない。君たちのことは大体知っている。君が【死なない体】ということもね」

「うっ」

「そして、君がＭ０１と始めて遭遇した人物であることも知っている」

「？」

なんだそれ。

「隠さなくていい。知っていることを話してくれ」

話せと言われても・・・

「確かに、足をひねった時、あなた達が僕の側にいることがわかったから、助けてもらおうと思ってわざと動けない振りをしたし、ＭＩＩについても知らない振りをしたのも認める」

だが、

「そこから先は、俺は知らない。Ｍ０１ってなんだ。ここはなんなんだ?」

骸は顔をしかめる。

「・・・まさか、覚えていないのか?あの事件を」

「事件?」

「始めてＭＩＩが具現化された事件。俗に【下男事件】。世間では最初は人間が犯人だと思っていた。しかし、ある組織により、ＭＩＩの存在が公になり、そしてまたあのバケモノが出現しだした。ここまでは知っているな?」

「知ってる」

「その【下男事件】に出現したモノを、我々はＭ０１と呼んでいる」

ＭはＭＩＩのＭだな。わかりやすい。

「そしてそれに最初に会い、倒した男が、君だ」

「・・・・へ？」

なん・・・だそれ。

「その事件以来、ＭＩＩの増殖は加速度的に上がり、バケモノの出現も多くなった。それに対応するため、私たちはこの組織【幻想屋】をつくった」

「ちょ・・・ちょっと待ってくれ」

静止をかける。

「俺があのバケモノを倒したって!?そんなことしてないぞ!」

「全て事実だ。そして達也。君にもこの組織に入ってもらいたい」

ようし、調子にノッテきやがったなこのやろう。

「待て待て!話を勝手に進めるな!俺は体が人と違うだけの一般人だ!あんた達のようなことは出来ない!」

「大丈夫。記憶ならこちらに蘇らせる心当たりがある。まずはそこにいこうじゃないか」

「おおおい!話聞けってぇの!」

無理矢理（骸に担がれて）変に明るい部屋に来た。

部屋の中は丸い空洞だが、そこには蚊ほどの四角いキューブが無数

に漂っている。それは、虹色に変化しながらやがて形を変え、今度は丸くなった。

「・・・なんだよこれ」

達也は薄気味悪く感じ、尋ねる。

骸は達也を降ろしながら答える。

「これがＭＩＩだ。ここには自切博士が開発したＭＩＩ捕獲機が作用している。そのため、ＭＩＩが消えたり、漏れたりせず、ここに留まっているんだ」

オヤジめ・・・ここと繋がっているのか？

「そしてこのＭＩＩは、君が倒れていた場所にあったものだ」

「何？」

「ここに入れば、何か思い出すと思うのだが・・・どうだ？」

・・・聞かれても、拒否はできないんだろうな。まぁ、ここで何も起きなければさっさと解放してくれるだろう。

「わかった。入るよ入りますよ」

達也は恐る恐る部屋に入る。

さして何も感じないが、なぜか・・・懐かしいくて、悲しくなる。

（なんなんだ、この気持ちは）

心が温まるような、凍りつくような。
不思議な気持ちになり、ついには、

「うっ」

倒れ込む。

「いい夢を。不死身君」

骸の声が微かに聞こえたかと思えば、意識はどこかに落ちていった。
そして、その女性と会うまで、そう時間はかからなかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3568s/

都市伝説の不死身さん

2011年11月22日02時56分発行